

## 9-9 唯一のシールド経験者として現場を任される

### 1. 立場と仕事

建設会社に入社し8年目が過ぎ、現場で工事主任として工事管理のかなりの部分を任されるようになっていた。工事内容はφ2480のシールドトンネル工事で、昼夜間連続施工を行っていた。現場社員の中でシールド工事経験者は唯一自分一人で、単身赴任で事務所宿舎に泊り込んでいた。

### 2. 遭遇した事態

シールド工事は電気、機械のトラブルがつきものであり、迅速に対応しなければならないのは当然であるが、社員の知識・経験で即座に対応できるものとできないものがある。

一方、シールド掘進では出来高に応じて作業員の給与が変動する契約となっていたため、トラブルで掘進が止まると出来高が上がらないことに加え、作業員の待遇にも影響が出てモチベーション低下の要因にもなる。このようなことから、トラブル対応には常に大きなプレッシャーを感じていた。

加えて、この現場ではシールド経験者が自分一人であったことから責任を重く感じながら、軽微なものも含めて度重なるトラブルに昼夜を問わず対応していた。

このような環境にあったため、シールド経験者の現場への投入と現場管理員の増員を会社に掛け合うべきか、会社の実情と自分の置かれている立場を踏まえて自分自身が頑張るべきか、悩んだ。

### 3. 対応内容とその結果

会社にはシールド経験者が少ないという事情もあり、また、自身がJVに長期間出向して得られたノウハウを最大限に発揮して会社のために頑張ることが自分に課せられた使命であると考えに至った。

現場を進めることと、作業員の待遇を低下させないことを念頭に、いかなる状況でも自分が先頭に立ってトラブル解決に立ち向かうことにした。そしてトラブルを解決した時の作業員の感謝の言葉や工事に対する熱い思いを仲間や部下に伝えるようにした。

その結果、社員、作業員とのコミュニケーションが非常に良くなり、シールドの到達に向けて皆が強くそして熱い思いをもってやり遂げることができた。

現場の工事主任としての率先力の重要性とともに、社員・作業員とのコミュニケーションの重要性を身をもって認識し、マネジメント力が向上したと実感する。以降、部下にもこの経験を伝えるとともに、合わせて、人と人のふれあい、辛い思いや苦しい思いを乗り越えた後の達成感についても社内で説いている。